

美術館のある風景 (第9回)

展覧会のなりたち〈その四〉

三菱一号館美術館 館長 高橋 明也



アムステルダム・ゴッホ美術館（東京に巡回するヴァロトトン展のバナーが壁に掛かっている）

つい先日、アムステルダム、パリ、マドリードと3都市を1週間余で駆け抜ける出張から帰ってきました。三菱一号館美術館の展覧会は、建物の成り立ち（原設計の建物は1894年に竣工）に鑑みて、19世紀後半の西洋美術を中心に扱っていくことが基本コンセプトですから、どうしても海外での仕事が多くなります。私に限って言えば、ここ何年かは多ければ1年に4-5回、計2か月近くは海外を歩き回り、様々な美術館の館長や学芸員、マネージャー、さらに展覧会コーディネーターや画商、収集家、研究者、修復家、写真家などと打ち合わせや交渉などを重ねてきました。

このリズムは前職の国立西洋美術館の研究員だった時代からほとんど変わりませんが、その頃でしたら一学芸員に徹し、特定の場所に腰を据えて、ある展覧会なり作品購入なりに関した交渉・調査、あるいは特定の研究課題に特化した調査・研究をじっくりと何日もかけてやっていたらよかったです。しかし今や館長職となるとそういうわけにはいきません。さまざまな都市、数多くの美術館を訪れ、大体4、5年ほど先まで俎上に上がっているいくつかの展覧会の交渉に飛び回らなければ何も進まないのです。同じ美術館員といえども、館長職は全く違う仕事です。時々昔に思いをさせて、ゆっくりと調査や研究に没頭できた頃が懐かしくなることもあります。

しかしよく思うのですが、昨今、メールなどのコミュニケーション手段が飛躍的に発達し、現地に足をわざわざ運ばなくてもかなりの仕事ができることが多くなりました。でも、どんな仕事でもそうでしょうが、直接相手に会って握手をし、共に語り合い、場合によっては一緒にお茶を飲んだり食事をしたりすることで、互いの人間的

理解がぐっと深まることは間違いありません。「日本の美術館は館員の顔が見えない」と海外の美術関係者からしばしば指摘されてきたのは、これまでそういった交流が希薄だったことによるのでしよう。

実際、今回もアムステルダム・ゴッホ美術館のリュウガー館長やマドリード・プラド美術館のサガサ館長とフィナルディ副館長、パリ・オルセー美術館のコジュヴァル館長などとは短い時間にもかかわらず旧交を温め、色々なことを語り合うことができました。また、他の中・小の美術館でも、自分たちの関わるプロジェクトを実現させようと、各館の担当学芸員や館長は皆一生懸命に話してくれ、理解を深めようと努力してくれました。彼らと向かい合っていると、現場の人たちの仕事に対する愛情がひしひしと伝わってきます。これはなかなかメールのような手段だけでは分からないことでしょう。

そうした現場の空気をなるべく直に吸ってもらいたいので、私は、なるべく若い人たちに一緒に行ってもらおうようにしています。もちろんそれは、電子機器の急速な進化と衰える一方の筆者の体力・視力に起因するリスク・マネジメントの一環でもあるのですが…。そして今回も学芸員と展示デザイナーに同行してもらいました。結果的には、一緒に展覧会を企画する相手方の美術館の人々も、こちらの現場の学芸員や実際に展示デザインを手掛ける若いデザイナーの話に自然と耳を傾けてくれることとなり、双方向のコミュニケーションは大変充実したものとなりました。今回は風邪でダウンし、パリで寝込むおまけも付きましたが、やはり百聞は一見にしかず、可愛い子には旅をさせろ…ですね。